蜻蛉日記にみる女性の生き方（2）

開催日　平成15年9月27日

講　師　本学教授　田　中　荘　介

蜻蛉日記は、日記というものの、日次記録ではなく、いわば回想録である。推定19歳で結婚して60歳で死去するまでの人生の、その半ば19歳から39歳までの結婚生活をふりかえって、書きとめたものである。上巻が33歳までのこと、中巻がそれから36歳までのことを記事としている。筆者によれば、その結婚生活は不幸で苦しみ多いものであった。

中巻の巻頭、元日の寿歌で、彼女は「三十日三十夜は我がもとに」と書いた。当時の結婚では、待つ身の立場におかれた彼女として、毎日毎夜、夫の兼家が訪れてくれることが、しあわせであった。しかし、次々と新しい女性を見つけてはそちらへ足を運ぶ夫に対して彼女の念願はかなうべくもなかった。平安時代女性の多くがそれを諦めでもって受け入れるしかなかったが、彼女は少しちがった。

たまに訪れてくる夫にむかって、彼女はやさしくなかった。当時、離婚の条件となる七つの規定（大宝律令）のひとつ、「嫉妬の激しいこと」の禁を破っても彼女は夫の訪れを切望した。そして、いかなる手をもってしても、彼女の努力は効果がなかった。

家の中で鬱屈した揚げ句、彼女は家をとび出して狂気の姿で寺へ走る。中巻の記事の中の圧巻は、二つの家出（石山詣でと鳴滝籠り）である。

旅中の描写は精彩を極め、迫力をもって読者の胸を打つ。石山詣でのとき、彼女は発作的といってもいいくらいで、供回りの準備もなく、夜明け前に家をとび出して、四条河原に打ち捨てられて積まれた死体を横目にしても怖いとおもわず、盛夏、庶民の往来する道を徒歩で大津の打出の浜まで歩き通すのである。平安貴族女性が、この長い道程を半日がかりで歩くというのは、相当な体力の持ち主でなければならないだろう。石山寺に着いて湯で汗を流し、夜が更けていくあたりの情景あるいは翌朝の湖面の描写は、ことのほか美しい。悲しみの目で眺めた風景が澄んだ筆使いで読者の脳裏に強い印象を刻む。

もうひとつの旅、鳴滝籠りのほうは、出かけたものの帰るきっかけを失い、長逗留になってしまう。彼女は世を捨てて尼になるという気はなかったが、周囲の人々とくに兼家はいささかあわてて、強引に連れて帰る策に出る。人々のこころの動きが巧みに写しとられている。中巻のこのあたりを読んでいると、もう日記の世界をこえて、物語の世界に読者を引き込んでしまう。一元描写ながら、客観描写に一歩踏み出たともいえる。「源氏物語」が書かれる少し前に書かれた、平安貴族女性の豊かな告白録である。